

言い訳を使用した断り指導の実践報告

A Practical Report on Instruction on Refusals Using Excuses

吉田好美（お茶の水女子大学大学院生）

YOSHIDA Yoshimi (Graduate Student, Ochanomizu University)

要 旨

本稿では、初級学習者を対象として行った言い訳を使用した断り指導の実践を報告する。実践では、日本語の断りのコミュニケーションにおいて、言い訳が重要な役割を担っているということを理解し、日本語の断りにおけるあいまい性を、言い訳使用という側面から気づくという目標を設定した。授業方法については肯定的な評価が得られ、本実践の授業デザインが、断りにおける言い訳使用について気づきを得るのに有効であることが示唆された。

This report introduces a practical lesson plan for beginners on refusals using excuses. In this lesson, we aim to make students understand that when using refusals excuses play an important role and also to be aware of the ‘fuzziness’ aspect inherent in refusals in using excuses in Japanese. It can be concluded that this type of class-design is effective for understanding the use of excuses in Japanese refusals.

【キーワード】断り，言い訳，気づき

1. 言語と文化を同時に学ぶ日本語教育

グローバル化が進む中で人的交流が盛んになると、言語のみならず、広くコミュニケーション能力の育成が求められるようになり、日本語教育現場においても、言語にとどまらず、文化をも同時に教える総合的教育（holistic education）の必要性が述べられている（森山 2010）。本来言語と文化は一体のものであり、言葉を学ぶということは、文法や発音といった形式をマスターするだけではなく、その外国語が話されている社会的、文化的背景を理解するということでもある。このことは、日本語の授業に文化の内容を取り入れることで、言葉が生きたものとなり、日本人と実際にコミュニケーションを行う際にも役に立つと思われる。

日本語教育で述べられる文化について、佐々木（2002）は大きく分けると3つあるとしている。まず1つ目は、知識、所産としての文化で、これはある集団によって学習され、共有され、伝承される体系や、集大成といった面を強く意識する文化概念である。2つ目はコミュニケーションに介在する文化で、文化的背景が異なる人同士の直接的な接触において、自己と他者の価値観や認識、行動様式の差異を意識する文化概念である。3つ目は個としての文化で、文化というものを個人化し、自分の中に自分のものとして解釈するという概念である。そして人的交流が盛んになってくると、特に2つ目のコミュニケーションに介在する文化の重要性が増してくるため、文化リテラシーの育成が必要となり（森山 2010）、言語と文化を同時に学ぶ日本語教育の必要性が高まると言えよう。

2. 初級における断り指導の方法

コミュニケーションに介在する文化の中で、重要なものの一つとして挙げられるのが、言語行動である。日本語教育現場で、一般的に勧誘や依頼や謝罪などの言語行動を指導する際には、言語形式だけを教えるのではなく、円滑なコミュニケーションを取れるようになるために、日本社会での文化的背景に基づいた方略も指導している。そして様々な言語行動の中でも、特に難しいもののひとつに、「断り」が挙げられると考えられる。

断りは、同文化内でも人間関係を維持するために細心の注意を払う言語行動であり、接触場面においては、更に互いの文化に注意を払わないと、摩擦が起こる可能性がある。そのため断り指導は日本語教育現場でも注意を払って行う授業の一つであると言える。

カノックワン(1995)は、日本語教科書の中の断りを分析したところ、不可と理由(言い訳)の組み合わせでは、「理由のみ」が最も多かったとしている。しかし実際、代表的な日本語教科書では、断りについてどのような指導がなされているのだろうか。

まず『みんなの日本語 I』第6課では、「(動詞ます形) ませんか」という文型が指導項目として挙げられているが、『みんなの日本語 I 教え方の手引き』では、この文型は話し手と聞き手がいっしょに行う行為を提案したり、誘ったりするときに使われるとしている。また同じ6課で指導する文型「(動詞ます形) ましょう」は、「(動詞ます形) ませんか」の提案や誘いに対し、積極的に応じる答え方として扱うとしている。その一方で、留意点として「誘いを断る場合はどう言うか、という質問には、「すみません、ちょっと・・・」を紹介する。「(土曜日は) 友達に会います」などの理由を加えてもいい。」とある。つまり断り際には、あいまい表現と理由の使用を促す指導をするように示されており、直接的な不可表現の使用については記されていない。

また第9課の会話は以下に示す会話例1のようになっている。

会話例1

ミラー：(ええ、元気です) あのう、木村さん、小沢征爾のコンサートいかがですか。

木村：いいですね。いつですか。

ミラー：来週の金曜日の晩です。

木村：金曜日ですか。金曜日の晩はちょっと……。

ミラー：だめですか。

木村：ええ、友達と約束がありますから、……。

ミラー：そうですか。残念ですね。

(『みんなの日本語 I』より抜粋)

この会話では、ミラーさんが木村さんを小沢征爾のコンサートに誘うが、木村さんは、「ちょっと」と言ったあいまい表現を使用して断っている。それからミラーさんが「だめですか」と察したあと、木村さんは「友達と約束がある」と言い訳をしたのちに、ミラーさんが「残念ですね」と木村さんの断りを受諾している。この会話には一言も直接的表現は使用されておらず、謝罪の言葉もないが、ミラーさんは木村さんの発言を受けて、断りと認識している。「教え方の手引き」によると、会話の目標として「誘いに対して簡単な理由を言って断ることができる」としている。

次に『新文化初級日本語 I』の例を挙げたい。17課 2-2)のセンテンスは以下に示す会話例 2 の通りである。

会話例 2

A: あさって映画を見に行きませんか。

B: すみません。あさってはちょっと都合が悪いんです。

『新文化初級日本語 I 教師用指導手引書』によると「相手を誘う表現と相手の誘いに応じたり、断ったりする表現を学習する。相手の誘いを断る場合は、前述の B のような表現を使うように指導する」とある。ここでは謝罪を述べた後、都合が悪いと言い訳をしており、直接的な断りは使われていない。

まとめると日本語教育現場における断りの指導は、「直接的な表現を使用せずに、あいまいに断る。」ということを示唆し、特に初級レベルでは「できない。」「だめです。」などの直接的表現を使用せずに、「すみません、～はちょっと。」といった、謝罪やあいまいな表現を使用したり、言い訳を述べて断る練習をさせたりすることが多いということが分かる。

3. 断りにおける言い訳の重要性

それでは、いつも日本語母語話者が断る際には、実際に教科書で習うような謝罪や「～はちょっと。」というような表現が、使用されているのであろうか。それは必ずしも、そうではないと言えよう。教科書で断り方を学習しても、日本語学習者にとっては、日本語母語話者が断っているのかどうか判断しにくく、それがミスコミュニケーションの原因になっていることもある。そしてそのミスコミュニケーションの原因のひとつには、断りにおける言い訳の使用に特徴があるからだと考えられる。なお断りの理由を説明する言語行為については、英語では *Excuse, Reason, Explanation* となっており (Beebe ら 1990)、日本語訳も、弁明 (藤森 1995)・理由 (カノックワン 1995) など様々な言葉が使われているが、本研究では、藤原 (2004) 西村 (2007) の先行研究を倣い、「言い訳」とする。

日本語の断りの言い訳に着目した研究としては、藤原 (2004)、西村 (2007) などがある。藤原 (2004) は、日本語母語話者とインドネシア語話者の勧誘に対する断りでは、日本語母語話者は「都合が悪い」などといった「曖昧な言い訳」が多く、インドネシア語話者は誰とどこで何をするという具体的な内容の理由を述べるなど「明確な言い訳」が多かったとしている。西村 (2007) では 断り発話の言い訳では、日本人は「体調不良」を、ニュージーランド人は「用事」を言い訳として用いることが多いとしている。以上の先行研究では、断りの際の言い訳の質の違いを明らかにしている。

もちろん言い訳の質の違いも、ミスコミュニケーションを起こす原因になりうるが、更にミスコミュニケーションを引き起こすのは、日本人が言い訳のみを使用して勧誘者に断りの意図を察することを要求することがあるからだと思う。

筆者は中国に滞在していたとき、ある中国人日本語学習者から勧誘を受けたことがある。しかしその日は用事があったため、断りの意図を伝達したのだが、その意図がいつまで経っても伝わらず、延々と勧誘を受け続けて困った経験がある。なぜこのような状況になってしまったかを考えたのだが、筆者は「その日は都合が悪い。」「用事があるから。」などと

言い訳のみを述べて、直接的に「行けない。」などの不可表現を使ったり、謝罪をしたりしていなかったからだと思った。その時筆者は、言い訳だけで断りの意図を察してもらおうと思ってコミュニケーションを取っていたことに気づき、更に、言い訳だけの断りを聞いたら、日本語母語話者は察してくれそうだが、日本語非母語話者はどうやらそうではないらしいということに気づいたのである。このように言い訳のみを述べて、相手に断りを察してもらうスタイルは、日本語以外の言語環境においてはそれが断りだと認識されず、断りの意図が理解されにくいという問題が起こってくると考えられる。言い訳のみを述べた断りに対する言語行動について調査した研究には吉田(2009)がある。吉田(2009)では、日本人女子学生とインドネシア人女子学生の勧誘場面での断りにおいて、断り手が直接的な表現や謝罪を使用せずに、言い訳のみを使用して断りを表した発話のあとの勧誘者の発話を分析した。その結果、日本人はすぐにその言い訳を断りと認識し、断りを受諾するが、インドネシア人は、言い訳のみだとすぐに断りを受諾せずに再勧誘する傾向があるということが分かった。

謝罪やあいまい表現に着目した断り指導はなされていても、言い訳使用という観点に着目し、言い訳のみの断りに気づきを与えるという授業実践についての報告は管見の限り見当たらない。

そこで本実践においては、言い訳が断りのコミュニケーションの中で重要な役割を担っているということを理解し、日本人の断りにおけるあいまい性を、言い訳使用という別の側面から気づくという目標を設定することで、本実践の授業デザインが断りにおける言い訳使用について気づきを得られるかを探ることとした。

4. 実践の概要

本実践は「言語と文化をともに学ぶ日本語の授業」をテーマとした、大学院の教育実習の一環として行われた。実習生は筆者を含めて3名で、あとの2名は日本語非母語話者であり、全3日のうち1日を筆者が担当した⁶⁾。実践場所は米国の大学の日本語クラスで、授業時間は1コマ50分であった。学習者は12名で、日本語のレベルは日本語能力試験の3級程度であった。

5. 実践の方法

5-1 授業目標と学習項目

本実践では、学習者がこれまで、日本語の教科書で習ってきたような謝罪と「～はちょっと。」という形式を使用した断り方の会話例と、言い訳のみで断りを伝達しようとしている会話例とを比較し、言い訳が断りの中で大きな役割を果たしていることに気づくことを授業目標としたうえで、直接的な表現や、謝罪などを使わずに、言い訳のみで断る練習を行う。

5-2 授業の内容

授業は、イントロダクション、事前課題の会話についての話し合い、教師からの説明、ロールプレイ、フィードバックという流れで組み立てた。イントロダクションとして、まず以下に示す表1の問題を提示して学習者に考えてもらった。

表1 イン트로ダクション

問題：日本人を映画に誘いました。日本人の答えは、つぎの3つでした。

断っているのはどれでしょうか。

- ① ごめんなさい。ちょっと。
- ② 明日用事があるんだよね。
- ③ ええ？ああ↓明日かあ↓⁽²⁾

まず3つの表現の中で断りを表しているものはどれかを考え、それを選んだ理由を述べさせた。①に関しては全員が断りを表していると、②と③については断りを表しているとするのかしないのか分からないという意見も見られた。②がなぜ断っているのかと聞いたところ、明日用事があるから、行けないと理解したとのことであった。

それから学習者に、実際にもし日本人に映画に誘われたら、どのように答えるか、と聞いたところ、「ちょっと」「明日が予定で行けないんです。」「もう約束があるから」などと言って答えるという回答が得られた。更に日本人が本当に「ちょっと」という表現を使って断っているのを聞いたことがあるか、という問いに対しては、聞いたことがある学習者と、聞いたことがない学習者がおり、中には「(日本人から見て、外国人である)私と話すときに、ちょっとと言っている。」のように、自分が外国人であるから、そのような表現を使う日本人がいるという話も出た。

次に、表2に示す事前課題の会話プリントを見た。事前課題は筆者が事前に配布し、目を通してくるように伝達していた。表2のⅠは断り手であるBが、勧誘者であるAの映画の誘いに対して、謝罪と「～はちょっと。」という表現で明示的に断りを表している会話例であり、表2のⅡは、断り手Bが言い訳のみで断りの意志を表そうとしているが、勧誘者Aが理解できず、何回も再勧誘をしている例である。更にⅡは、勧誘者Aがまた予定を教えてほしいと、断り手Bに言っている左側の例と、断り手Bが自分から予定を連絡するという右側の例に分けられており、それぞれの違いについて、ペアになって考えてもらった。

違いとして、Ⅰは「会話が短く、謝罪や『～はちょっと』が出ているため、はっきり明示的に断っていてわかりやすい。」「教科書で習ったとおりである。」といった意見が出た。それに対して、Ⅱは断り手が「言い訳をたくさんしていて会話が長い。」「言い訳をたくさんしているということは、本当は行きたいという気持ちを表している(だから断りじゃない)」という意見が出た。また勧誘者側に立った意見も多く見られ、「何回も質問している。」「断り手のことが好きだと思う。」「日本人じゃないかもしれない。」などといった、意見が出た。また断り手が自分から予定を連絡すると言っている右側の例については、誘ってくれた勧誘者に対して失礼ではないが、勧誘者から断り手に予定を教えてほしいと言っている左側の例は、断り手が勧誘者に対して失礼だという意見もあった。

以上のような違いを述べたあと、筆者から日本人の断りのコミュニケーションでは、言い訳のみで断りを表す方略もあるということを説明し、本稿3節で述べた筆者の勧誘と断りの経験談について述べた。そして自分自身が日本語母語話者として断りのコミュニケーションの違いについて気がついたことが、今回の実践授業に至るきっかけとなったことを話した。

表2 事前課題

授業の前に、次のIからIIの会話を読んで、問題に答えてください。わからない言葉は調べておいてください。

- I A: Bさん、土曜日映画に行かない?
B: ああ、土曜日か・・・土曜日はちょっと。
A: そうか。残念だね。
B: ごめんね。また、今度ね。
A: ううん。こっちこそ、ごめん。
B: じゃあね。
A: またね。

問題 Bさんは、映画に
①行けます ②行けません ③分かりません

- II A: Bさん、土曜日映画に行かない?
B: ああ、土曜日か・・・土曜日は都合が悪くて・・・
A: 何かあるの?
B: うん。ヨシダ先生の宿題があって、月曜日に出さなきゃいけないんだ。
A: そうか。忙しいんだね。じゃあ、次の週末は?
B: 次か・・・。次も用事があって・・・
A: どんな用事?
B: 日本から、友達が遊びにくるかもしれないから、いろいろ案内しなきゃいけないの。
A: じゃあ、いつがいい?



- B: ああ・・・今、まだちょっと分からないの。
友達から連絡ないし。
A: そうなんだ。じゃあ予定が分かったら、教えて。
B: うん、わかった。

問題 Bさんは、映画に
① 行きたい ② 行きたくない
③ 分からない

- B: ああ・・・今、まだちょっと分からないの。
友達から連絡ないし。
友達が来る予定がわかったら、
また電話するよ。
A: うん、わかった。

問題 Bさんは、映画に
① 行きたい ② 行きたくない
③ 分からない

そのあと日本語非母語話者の実習生2名に、日本人との断りのコミュニケーションの中で、外国人として気付いたことや感じた違和感について、体験談を述べてもらった。1人は、お世話になった人を食事に誘ったが、「ちょっと用事がある」という一言だけの返事で終わってしまい、行きたいのか行きたくないのかが分からなかった。それでどんな用事かと聞くと、銀行に行くという返事が返ってきて、銀行が自分より大事なのかと少し怒ったことがあるという経験を語ってくれた。またもう1人は、ある日本人を勧誘したときに、先の予定がまだ決まっていないから即答できないという返事をもらった。しかし何も予定が決まっていない状況で、自分が先に勧誘をして約束をしたのに、なぜ決めないのかと怒りを感じたことがあるとあった。

次にペアを組んでもらい、勧誘者と断り手に分かれてロールプレイを行い発表してもらった。ただし断り手は、言い訳のみで断り、「すみません。」などの謝罪表現を使わないようにするという条件を出した。また、相手の言うことを繰り返し、下降イントネーションを入れた会話を作るように指示した。

以下学習者が行ったロールプレイ例を示すこととする。Aは勧誘者で、Bが断り手を表す。またロールプレイ例に出てくる人名は仮名である。

ロールプレイ例1では、断り手が「忙しいので」「予定があつて」などのように言い訳を中途文で終わらせていた。それ以外にも「んー」という言いよどみの表現を使用したり、「明日か」「水曜日」などのように勧誘者の発言を一部繰り返したり、「予定が」「ササキ先生の宿題が」と主語だけで終わらせたりして、勧誘者の発話を促そうとしていた。このように言い訳以外にも、自分なりに様々なあいまい表現を使うことによって、断りを伝えようとしていた。

ロールプレイ例1

- 1A: タナカさん、明日はお風呂に行かない?
- 2B: んー明日かー明日かーんー
- 3A: 何かあるの?
- 4B: 明日は んー 確か 予定が
- 5A: 忙しい?
- 6B: 結構忙しいのでー 明日は忙しいですね
- 7A: じゃ、水曜日は?
- 8B: 水曜日、水曜日も うん けっこう予定があつて
- 9A: ではいつがいい?
- 10B: いつがいいっていったら、けっこう忙しいんだけど
- 11A: どうして忙しい?
- 12B: うん まあ ササキ先生の宿題が ううん
- 13A: そうなんだ じゃ 予定が分かったら教えて
- 14B: はい もちろん

ロールプレイ例2では、断り手は勧誘者の勧誘を受ける度に、まず「土曜日ですかーあー」「そうですかーあー」というように、いったん勧誘者の発話の一部を繰り返したり、

受け止めたりしたのちに、ためらいを表出していた。その後でどのような言い訳をすればいいか考え、また謝罪や不可表現を使用しないように配慮しているように見受けられた。

ロールプレイ例2

- 1A: シモーネさん、土曜日はパーティに行かない?
2B: 土曜日ですかーあー実は あー 日曜日とても忙しいから家に帰らないと
3A: でも パーティは遅くないだよ
4B: そうですかーあの でも 私は車がないから
5A: あーでもシモーネさん 私は車があります シモーネさんは乗せてあげます
6B: そうですか あの あー 実は 宿題がありますから あのー
土曜日宿題しなくちゃ
7A: じゃまた

筆者はロールプレイが終わるごとに、学習者が上手に述べていた「予定があつて」「車がないから」などといった言いさしで終わる言い訳の表現について取り上げ、フィードバックとした。一方で、つい「行けない」などと言った不可表現を使用したペアについては、筆者がその場で指摘するだけでなく、周りの学習者も「それはだめ」というような発言をして反応していた。

もちろんこれらはロールプレイであり、初めから誘い手は断られることを知っていて勧誘しているため、実際の場面での誘いや断りとは異なると思われる。ただ、各自言い訳のみを使用するように努力し、言いよどみやくり返しを付加しながら断りを表出していたということで、学習者に言い訳使用に関する気づきが得られたことが窺えた。

6. 授業後アンケート

授業を終えた直後、学習者にアンケート調査用紙を配布して、授業に対する感想・評価を日本語若しくは英語で自由に記入してもらい12名中11名のアンケートを回収した。まず授業全体については、「面白かった。」「分りやすかった。」「教科書にないことを学べた。」「勉強になった。」などのような肯定的な感想が大半を占める結果となった。また『「～はちょっと」や『できない』という直接的表現を使用せずに断るのが大変だった。』『日本の文化はあいまいである。断りと依頼はダイレクトではない。アメリカとは違いがたくさん。』という、断り方の難しさについて述べた感想や「日本人が『ちょっと用事がある』と言うなら、私は質問しない。』『ちょっと』とか『ごめん』がなくてもいい。むしろないほうがいい」「(事前課題Ⅱ)のAさんは中国人だ」というような気づきや感想を述べたものもあった。また「日本人を誘うときにしつこくなりすぎないように気をつけたい。」というように断り手だけでなく、勧誘者に着目した気づきも見られた。

7. まとめと今後の課題

今回は文型など言語形式に着目するというよりは、言い訳が断りの中で果たす役割について、気づきを得るところを大きな目標にした。授業に対する評価については、肯定的な感想が得られ、本実践の授業デザインが日本語の断りにおける言い訳について気づ

きを得ることに有効であることが示唆された。しかし本節では今回の実践での問題点について述べたいと思う。

まず事前課題についてはダイアログが書かれたハンドアウトのみであった。実際の会話では、顔の表情や視線などの非言語行動を見たり、イントネーションや語調、間の置き方を聞いたりすることで、それが断りかどうかを判断することも多いため、ディスカッションの際の判断材料が少なかったと思われる。今後、会話例は録音もしくは録画データを使用したほうが、実際の会話練習に役立つと思われる。

次に今回の授業デザインでは、言い訳についての気づきは得られたと思われるが、なぜ日本語の断りにおける言い訳にそのような特徴が見られるのか、背後にある文化的背景や日本語母語話者の相手への配慮の仕方についてディスカッションをする時間が、1コマ50分の実習という限られた時間内では取れなかった。今後は単に気づきを得るだけでなく、なぜそのような特徴が見られるのかという文化的背景にまで言及し、ディスカッションができるような授業デザインにしたほうが、言語文化に対する理解が深まるとと思われる。

また「日本人は言い訳のみで断る」という気づきは、あくまで断りのコミュニケーションの一側面なのであるが、場合によってはステレオタイプとしてみなされる恐れがある。例えば、日本人に「考えておく」と言われたらそれは断りであるという、有名な例があるが、この「考えておく」も、その場のコンテキストや人間関係で、断りなのか本当に保留の意味なのか判断が難しく、一概に断りであるとは言い切れないことが多い。今後の授業デザインでは、ステレオタイプにならないように、断りのコミュニケーションの一側面であるということを伝えるべきであると考えます。

最後に今後の授業の発展性について述べたい。本実践では断り手だけでなく、勧誘者のほうに着目した意見やコメントがいくつか見られた。おそらく自分たちが断る側に立つより、日本人を勧誘する側に立つこともありうると思定したからだと思われる。今後は、断りのコミュニケーションの中でも、勧誘者に着目した授業計画も立ててみたい。文化によって相手への好意や配慮の示し方が異なること、それを学習者がどのように受け止めて調整しながら日本語母語話者とコミュニケーションをとっていくのか、また勧誘者が断り手の意図を発言や態度からどう読み取って、コミュニケーションを進めて行くのかという点で、断りと勧誘をリンクさせて、授業内容をより発展させていきたいと考える。

謝辞

本実践は、お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」の一環として行われたものである。ご指導をいただいた森山新先生に、この場を借りて心より感謝申し上げます。また本実践で日本における断りの体験について話していただき、授業デザインにアドバイスをくださった実習生のお二人にも感謝の意を表します。

注

- (1) 筆者以外の実習生は、それぞれ「御礼」と「依頼」について実習を行った。授業は午前1コマ、午後1コマ、計2コマで同じ内容を行ったが、本稿では午前のクラスのみを分析対象とした。

- (2) 「？」は上昇イントネーションで、「↓」は下降イントネーション、「—」は引き伸ばしをそれぞれ表す。

参考文献

- (1) カノックワン・ラオハブラナキット(1995) 「日本語における「断り」-日本語教科書と実際の会話との比較-」『日本語教育』87号, 25-39, 日本語教育学会
- (2) 佐々木倫子(2002) 「日本語教育と「文化」概念」『21世紀の「日本事情」-日本語教育から文化リテラシーへ-』第4号, 146-155, くろしお出版
- (3) スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級I 教え方の手引き』88-89, 117, 株式会社スリーエーネットワーク
- (4) 西村史子(2007) 「断りに用いられる言い訳の日英対照分析」『世界の日本語教育』17, 93-112, 国際交流基金
- (5) 藤原智栄美(2004) 「日本語話者とインドネシア語話者の断りに関する研究」『大阪大学言語文化学専攻博士論文』
- (6) 藤森弘子(1995) 「日本語学習者に見られる「弁明」意味公式の形式と使用-中国人・韓国人学習者の場合-」『日本語教育』87号, 79-89, 日本語教育学会
- (7) 文化外国語専門学校(2000)『新文化初級日本語I 教師用指導手引書』138, 凡人社
- (8) 森山新(2010) 「Holistic Education Of Japanese Language in the Global Era」『お茶の水女子大学 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成21年度活動報告書 海外教育派遣事業編』, 126-130, お茶の水女子大学
- (9) 吉田好美(2009) 「勧誘場面の断りに見られる「弁明」について-日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較-」『第38回日本言語文化学会研究発表要旨』, 124-127, お茶の水女子大学日本言語文化学会
- (10) Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Welzs, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds) *Developing communicative competence in a second language*. 55-73.